

司馬遼太郎はいかにして乃木愚将論にたどりついたか
——『殉死』の基礎的研究（第Ⅱ篇）——

高木美栄
愛知教育大学大学院修士課程二年

司馬が参照した文献について

司馬遼太郎が『殉死』の冒頭において、学徒出陣により牡丹江の戦車第一連隊に配属され、旅順戦跡の近くを通った時に「なぜ、これだけの大要塞の攻撃にこのひとのような無能な軍人をさしむけたのか」という「子どものころから持ちつづけてきた多少の疑問」を「あらためて感じた」と述懐している。『殉死』
（一三頁）

失敗続きの旅順攻略戦に対して「東京の若い幕僚はさわいだ」場面である。

乃木ら攻囲軍の司令部はなお二〇三高地をせめようとせず、そのために海軍側がいらだった。バルチック艦隊の回航がちかいというのに第三軍は敵要塞の外囲いの正門を素手でたたいていただけであり、（中略）ついに乃木罷免内案が東京から満州軍総司令官大山巖あてに出された。が、大山はそれを黙殺した。（中略）

しかし一国の存亡のためには捨てても置けず、総参謀長

の児玉源太郎に相談した。児玉はすでに決意していた。

「私がやりましょう」

と、児玉はいった。

（中略）児玉は出発にあたっていま一つ大山に頼まねばならない。

児玉にすれば乃木を押しつけて自分が指揮をとるとなれば現地司令部の抵抗が大きいにちがいない、その抵抗があれば児玉の独断専行はできなくなり、作戦遂行は不可能になる。

児玉が大山に要求した秘密事項というのは、乃木とその幕僚が自分の指揮をこぼんだばあい、即座にかねらの機能を停止させる権能がほしいということであった。大山はやむなくそれを承知した。

児玉は、大山総司令官代理という全権代行の特別資格を帯び、煙台の総司令部を出発した。『殉死』九〇（一頁）

その夜、児玉と乃木とは、（中略）穴のなかにもぐりこんで語り合った。（中略）もつとも言いづらいことを児玉はこ

の装置なかでいわねばならない。

——このおれに、第三軍指揮の全権をまかせよ

ということであつた。もし乃木がことわるならば、児玉は大山巖の密書をとりだし即座に乃木を誅首して自分が第三軍の司令官代理にならねばならなかつた。

(中略) その情景は推測するほかになく、ついに両人とも墓場へゆくまでこれについては口を閉ざした。ただ明白なことは児玉が多く言葉の費やすまでに乃木が児玉の提案を受け入れたことであつた。この瞬間以後、旅順攻略の指揮権は陸軍大将男爵児玉源太郎に移り、乃木はそのおもてむきの表徴となり、伊地知参謀長以下はその作戦機能を停止させられたことになる。(同、一〇〇、一頁)

本稿では、司馬は、どのように児玉の指揮権交代に注目していったのか、その経緯を追ひ、どのように児玉の武功を練り上げていったのであろうか考察する。

司馬は『別冊 文藝春秋一〇〇号記念特集』(一九六七年六月五日発行)「要塞」に、「参考にしたおもな書目」を列記している。まず、司馬が参考にした主な書目を中心にして、司馬がリストに挙げていないものも含めて、児玉の指揮権交代に関する描写を見ていく。軍関係者が執筆したものでもあつても、私的な出版に関しては民間の分類に入れた。

《分類》

(*司馬が参考にした主な書目の中に掲載されていないもの)

軍関係の出版物

帝国軍人教育会編『日露大戦史』(一九〇六、帝国軍人教育会)
謀本部編纂『明治卅七年日露戦史 第六卷』(一九一四、東京偕行社)

*沼田多稼藏『日露陸戦新史』(一九二四、兵書出版社)

高柳光壽(編)『大日本戦史 第五卷』(一九三八、三教書院)

●民間の出版物

○乃木と児玉の両者に関わる出版物

*半井列(他)『訂正 日露戦史 第三卷』(一九〇八、博文館)

佐藤清勝『予が観たる日露戦争』(一九三一、軍事普及會)

大山元帥傳編纂代表者 尾野實信『元帥公爵大山巖』(一九三五、大山元帥傳刊行會)

*『日露戦役回顧座談會』(『東京朝日新聞』一九三五年二月一日〜三月八日)

*『名將回顧 日露大戦秘史・陸戦篇』(一九三五、朝日新聞社)
今村均『乃木大将 今村均大将回想録 別冊 青春篇(下)』(一九六一、自由アジア社)

同『乃木將軍』(一九六四、全国戦争犠牲者援護會)

○乃木関係

塚田清市『乃木大将事蹟』(一九一六、私家版)

*津野田是重『旅順に於ける乃木將軍 斜陽と鐵血』(一九二六、偕行社)

*同『奉天に於ける乃木將軍 軍服の聖者』(一九二九、戦記名著刊行會)

松下芳男『乃木希典』(一九六〇、吉川弘文館)

○児玉関係

森山守次『児玉大将傳』(一九〇八、星野錫)

宿利重一『児玉源太郎』(一九三八、對胸舎)

軍関係の資料

軍関係の資料においては、二〇三高地陥落前の一二月一日に児玉が旅順訪問をしたという内容は、参謀本部編纂『明治卅七

八年日露戦史 第六卷』(一九一四、東京偕行社)と沼田多稼藏『日露陸戦新史』(一九二四、兵書出版社)に見られる。

参謀本部編纂『明治卅七八年日露戦史 第六卷』「第九篇 旅順要塞ノ攻略」では、一月一日の正午「兒玉大將第三軍司令部ニ著シ」とあり、大山総司令官から増援された「第八師團歩兵一聯隊」が派遣されたことが記されている。(五二六頁)

さらに「十二月五日ヨリ六日ニ亘ル情况」では、「歩兵第十七聯隊(中略) 八午後五時四十分兒玉大將ノ指示ニ依リ軍司令官ノ使用ニ供セラレ同司令官之ヲ第七師團ニ増加シ」と記録されている。(同前、五五三・四頁)

もともと歩兵第十七聯隊は、大山総司令官の配下にあつたものだが、大山の訓令により、これを総司令官の名を以て兒玉が使用したのである。よって、「兒玉大將ノ指示ニ依リ」という範圍は、大山より増援された歩兵第十七聯隊に限定される。

沼田多稼藏『日露陸戦新史』には、兒玉が一月二十九日「午後八時總参謀長は烟台を發し第三軍に急行す」と記されている。(一八三頁)

しかし、どちらも兒玉が乃木に交代して臨時に第三軍の指揮権を執るということには触れられていない。

民間の資料

次に民間の資料から、便宜上、年代順に兒玉の旅順訪問における描写を追っていく。

半井冽(他)『訂正 日露戦史 第三卷』(一九〇八、博文館)には、「兒玉大將(中略) 一〇三占領の状況を、逐一大山總司令官に電報し」と記録されているだけにすぎない。(七二頁)

森山守次『兒玉大將傳』(一九〇八、星野錫)では、一月一日に兒玉が旅順に到着し、「新に第八師團の一箇聯隊を増援し、自ら軍を指揮して之れが攻撃に參與せり」と触れている。(四〇

三・八頁)

森山は、兒玉が乃木に交代して臨時に第三軍の指揮権を執つたとまでは言っていないものの、作戦の主導は兒玉にあつたとを述べている。

乃木の部下であつた塚田と津野田の資料には、兒玉が旅順を訪問したことは記されているものの、重要視されていない。

佐藤清勝『予が觀たる日露戦争』(一九三一、軍事普及會)では、佐藤が第三軍に所属している友人から聞いたという「旅順攻撃の物語」を「二〇三高地を占領し得たのは全く兒玉大將のお陰であつた」と回顧している。(二五四頁)しかし佐藤は、兒玉の具体的な行動については記しておらず、兒玉が第三軍の指揮権を代行したことについても触れていない。

大山元帥傳編纂委員編『元帥公爵大山巖』(一九三五、大山元帥傳刊行會)では、一回目(九月一八日)の兒玉の旅順訪問について「視察し得たる委細状況を元帥に報告する所があつた」と記されている。(六九三頁)しかし二回目(十二月一日)の訪問については記載されていない。

宿利重一『兒玉源太郎』(一九三八、對胸舎)では、『参戦二十將星回顧卅年 日露大戦を語る 陸軍篇』(一九三五、東京日日新聞)の六八から七〇頁にかけて、兒玉が旅順訪問した際の随行員であつた田中國重の回顧が紹介されている。

田中は「参謀等の歸つての報告によると、旅順港内に七艘位の軍艦がある。その他に多數の船舶もある」ので「兒玉さんの主張」により「それちやスグ射と云ふことになつた。」

また、一月三日から四日に掛けて「十二珊榴彈砲十五門、九珊臼砲十二門の陣地變換を行ひ、そして北太陽溝、鴨湖嘴の砲臺攻撃を命ぜられた」のは「兒玉さんが主張して陣地變換することになつたのです。」と回顧している。(六二二・三頁)

宿利が紹介した田中の回顧では、作戦の主導は兒玉にあるこ

とを述べている。

司馬は、児玉の指揮権交代について辿る中で、宿利重一『児玉源太郎』の中で触れられている田中國重の回顧に注目し、田中の回顧の初出に直接、あたったのであろう。なぜならば、司馬は参考にした主な書目の中に、「日露戦役回顧座談會」の記事及び『名將回顧 日露大戰秘史・陸戰篇』（一九三五、朝日新聞社）を挙げていないものの、ここに記された回顧談なしには描くことができない幾つかの場面があるからである。

田中國重は「日露戦役回顧座談會」（一九三五年二月二日、東京朝日新聞社主催）において、児玉の「作戦指導」により二〇三高地は陥落できたという「秘史」を公にしたのである。

——田中國重の回顧——

田中國重は、「日露戦役回顧座談會」において、児玉が「第三軍の作戦指導」のために「必要の場合には、児玉大將が總司令官に代つて第三軍に適時命令を下す機能を與ふる」という大山總司令官の「命令書懷中深く秘めて」いたことを打ち明けた。田中は、乃木と児玉の關係は「非常な御親密の間柄」であり、乃木が児玉の提案をすんなりと受け入れ「和氣藹々の間に物事が解決し」たので、「實際はこの權能の行使には立至ら」ずに「第三軍の面目」は保たれたことも回顧している。

また田中は、「夜間の射撃」が身方撃ちになることを攻城砲兵司令部がおそれていたにも関わらず、「我二十八サンチ砲をして十五分間隔きに一發の割合に、二〇三の頂巔を射撃せしめたい」という「児玉さんの御意圖」があつたことも述べている。

さらに陣地変換についても、それまでは「第三軍の方ではい／＼行きがかりがあつて實行されなかつた」ものの、児玉が第三軍に来てからは「それをやらうといふことにな」つたと述べている。（『東京朝日新聞』一九三五年二月一三日・三月八日「日露戦役

回顧座談會

田中の特筆すべき点は、作戦の主導は児玉にあつたことを回顧し、事実上の指揮権交代があつたことを述べているところである。司馬は、「穴居会談」の場面を描くにあたり、田中國重の回顧談に大きく依拠したのである。

田中國重が谷寿夫に打ち明けたこと——『機密日露戦史』——

実は、田中國重が「日露戦役回顧座談會」で語る以前、田中は陸軍大学校兵学教官である谷寿夫から取材を受けた際、この回顧談と同様の内容を語っていた。谷は参謀本部から公刊された戦史は、「表面に現われた事実ばかり」であるから、當時を知る田中の所へ相談に来たのである。谷寿夫は一九二三年（大正十二年）頃、陸軍大学校の教科書として使用する『機密日露戦史』を執筆中であつた。（原本は、大正一四年陸軍大学校調製、がり版刷、全一二卷二二章である。當時は、陸軍大学校と参謀本部だけに保管されていた。谷の死後、これを全一卷二〇章に編集し、一九六六年、原書房より出版された。）

谷寿夫『機密日露戦史』（一九六六、原書房）第六章「児玉總参謀長の南下とその活躍」（二三三・八頁）には、次のように記されている。

予は友人として腹藏なき意見を陳開したし。これが為め要すれば一時軍司令官の指揮権をも借用したきを以て、希くは貴兄の代理たる一筆の添書き授けられたしと。此時児玉大將の手は懷の書狀に触るる所あつたが、遂に之を要せずして乃木大將は快諾の上、書狀を児玉大將に附与した。（二三五頁）

田中の回顧には、「一時」軍司令官の指揮権を「借用」という言葉はないが、谷はこのようにまとめている。

以上の点を田中の回顧と比較してみると、田中の回顧を

もとにして『機密日露戦史』の旅順戦の項目は成り立ち、陸軍大学の授業として議論されていたことが知られる。

谷は『機密日露戦史』の中で、児玉の行動を「軍規軍律上大問題」と指摘している。なぜならば、天皇によって命ぜられた第三軍司令官の指揮権を大山総司令官が児玉に委譲したからである。このために、軍関係の資料には児玉が第三軍に「作戦指導」を与えたことは記されなかったのである。

児玉の部下であった田中國重は、ただ熱心に児玉の「作戦指導」により二〇三高地が陥落できたという埋もれた功績を顕彰したいだけであり、軍司令官としての乃木の評価を貶めるといふ思惑はない。しかし、その田中の意図しないところで、乃木の軍司令官としての能力に波紋を投げ掛けたことになった。田中の発言は、谷が執筆した『機密日露戦史』に影響を与え、陸軍大学の授業において、乃木の軍司令官としての是非が議論されたのである。

「密書」の問題

司馬は、児玉が大山巖から託された「密書」を携えていたと描いている。これについて考察する。

一つ目は、「密書」であるから、「密書」そのものの存在自体が不明である。また、乃木が児玉に渡したと言われる「代理たる一筆の添書き」も保管されていない。

二つ目は、軍規上、大山の「密書」では、軍司令官の交代はできないということである。

松下芳男は「乃木希典と上村彦之丞」（『文藝春秋臨時増刊「坂の上の雲」と日露戦争」昭和四七年十一月）の中で、次のように評している。

児玉総参謀長が、大山総司令官の命をうけて旅順に来て、作戦の助言をしたことは本ただけれども、乃木に代って作

戦指揮をしたなどとは、全然ウソである。軍の定則として、形式的であるにしても、天皇の命令なくして、軍司令官の指揮権を取り上げるなどということができないものではない。また二〇三高地攻撃の新方策は、児玉によって決定されたということもウソで、児玉の旅順到着前に作案されていたのが、児玉の到着後の参謀会議で確定されたというのが事実である。どうも俗評は、乃木の無能ぶりを、虚実取りまぜて宣伝するに熱心である。（七一頁）

松下が指摘するように、軍規上、総司令官の大山が児玉に託した「密書」では軍司令官の指揮権を剥奪することはできないのであるから、公式的には、児玉が乃木に交代して臨時に第三軍の指揮権を執ることなどあり得ないのである。事実上、児玉が第三軍の指揮権を臨時に執っていても、形式上は乃木が第三軍司令官であることには変わりはない。つまり公式書類上による軍司令官の交代は行われていないのである。

しかし、ここで松下が、「全然ウソ」だと反論していることも、あまりに書類上の指揮権交代に囚われ過ぎているのではないか。田中の回顧にあるように、事実上の指揮権交代はできるのである。

このように、書類上と事実上の指揮権交代の意味の相違を理解すれば、司馬が、乃木のことを「おもてむきの表徴」と描いた意図も明らかになる。司馬は、形式上、乃木の指揮権は児玉と交代していないが、事実上は交代したことを表現したのである。

よって松下は形式上の軍司令官の交代について、司馬の描写を批判しているので、これは司馬批判にはなっていない。

このように軍司令官が交代するという意味について、形式上と事実上の相違が、児玉の指揮権交代という議論を生みだす原因となっている。軍関係の資料には、児玉の旅順訪問について

は重要視されておらず、一方、児玉側の資料では、児玉の「作戦指導」によって二〇三高地陥落へ導いたというように見解が分かれている原因もそこにある。

後で詳述するが、司馬が『殉死』の下準備として、谷寿夫『機密日露戦史』を読んでいない旨を言っているのであれば、次に述べる今村均の回顧は、田中國重の回顧とは、もう一つ別の乃木「愚将」論への司馬が辿った道筋と言えるであろう。

——今村均の回顧——

今村均『乃木大将 今村均大将回想録 別冊 青春篇（下）』（一九六一年、自由アジア社）を中心にして、今村の回想を追ひ、乃木の軍司令官としての能力が陸軍大学校内において議論されていたことを見ていく。

乃木の殉死から一一年後、今村は、上原勇作元帥（日露戦当時、野津第四軍参謀長の補佐役副官になっていた。『機密日露戦史』を執筆中であった陸大兵学教官の谷寿夫大佐（後中将）が、今村の所へ相談に来た。谷は「真相をはっきりさせた日露戦史を作り」たいという意思があつたものの、当時の老將軍は口を噤んでいる。そこで、上原元帥から真相を話して頂くように、今村から上原元帥に相談して欲しいという旨であつた。（二二二・三頁）

特に、谷は「われわれが軍神として、崇めている乃木將軍が、旅順を落としたのではなく、“実際は児玉將軍が攻略したのだ”などと記述することは、何んだか氣がとがめてならない。」と配慮していたのである。（同前、二二五頁）

これに対して上原は、大山総司令官の「大度量」と絡めて、「児玉さんが旅順に行ったので、乃木さんの下の伊地知参謀長は、督励されたであろう。が、旅順を攻略したのは、名実共に乃木將軍だ。」と答えている。（同前、二二七・八頁）

また今村は、旅順要塞攻略戦における児玉の督戦について「武將としての児玉大将は、乃木將軍の上に見らるべきものだろう」という評価が陸軍大学校の戦史研究として提起されていたことを回顧している。（同前、二二八頁）

乃木の軍事能力を疑問視する意見の代表として、今村は、参謀本部の同僚、陸軍大学校首席卒業の藤室大尉が記した「武將論」を紹介している。それは「どんな高潔の軍人でも、敗戦を招いたのでは、祖国の忠臣ということとは出来ない。よって将来の將官は、戦術、戦略に秀でており（中略）私行上の清廉とか、人格の高潔とかを、過度に重視されてはならない」という内容である。（同前、二二九頁）

よって藤室は、「旅順攻略の功績は、多く児玉大将の能力に帰せらるべきもの」と言うのである。（同前、二二九頁）

最後に今村は、乃木と児玉を「比較すること自体が間違い」であると言う。児玉と伊地知は比較できるが、乃木については「旅順に存在したこと自体が、攻略の主導力」であり、「全軍の衆心一致」を得たと述べている。（同前、二二二・二頁）

今村は乃木の軍司令官としての人徳については評価しているものの、軍事能力については触れていない。結局、今村は藤室に対して概ね肯定しながら、「軍神」乃木像に配慮し、乃木の軍事能力について触れることを禁忌しているのである。

今村均『乃木將軍』（一九六四、創全国戦争犠牲者援護會）でも同様に、乃木の軍事能力については触れておらず、「全將兵が“この人の下でなら”と敢闘をつづけるような信頼をかけてる將師は「乃木しかいないという大山元帥の確信を紹介している。（二二頁）

司馬が、田中國重と今村均から受けた影響——乃木の軍司令官としての能力——

司馬は、今村が世間の配慮から触れることができなかった乃木「愚将」論を今村の回想によつて確証していったのではないかと考えられる。児玉が乃木に交代して第三軍の指揮権を執ることにより、二〇三高地は陥落し、旅順港内の敵艦隊を撃滅させたことが、開城を早めたという司馬が立てた仮説は、田中の回顧談や今村の回想録を根拠として組み立てられていったものである。

ただ、司馬は、児玉が乃木に代わつて第三軍の指揮権を臨時に執るに至つたことについて、児玉側の資料に偏り過ぎている。例えば、旅順要塞攻略戦において、「甲案」東北正面の望臺側から攻めていくのか、あるいは「乙案」比較的防備の手薄である西方正面の二〇三高地側から攻めていくのかという問題についても、大本営と総司令部の意見の相違、総司令部と第三軍の齟齬があつたという事実を司馬は考慮していない。ここでも、乃木を「無能」として描くために、旅順要塞攻略戦を効果的に盛り上げることが第一になつてゐる。

司馬は「旅順」から考える」（『現代小説』一九七一年五月号、『歴史の中の日本』一九七四、中央公論社）で、『殉死』（一九六七、文藝春秋）の執筆準備期間中に「そのころはまだ谷寿夫（旧陸大教官・中将）の『機密日露戦史』は刊行されていなかったと思います。（中略）その後、谷氏のものを読み、私の思つていたのとちがひことがのべられていましたので、安堵しました。」と回顧している。（八八頁）谷寿夫『機密日露戦史』は一九六六年に原書房より出版されているので、「刊行されていなかった」という司馬の回顧は勘違いである。

司馬が『殉死』執筆後の回想において、わざわざ谷寿夫『機密日露戦史』（一九六六、原書房）に触れていることに注目すると、おそらく司馬は、先述の田中の回顧と今村の著書から『機密日露戦史』の存在と重要性を知つたのであろう。しかし『機密日

露戦史』は、軍関係者以外は入手不可能だったので、『殉死』の執筆に際して読んでいなかったということであろう。

司馬は『機密日露戦史』を読む以前に、二〇三高地攻略の功績は児玉の指揮権交代にあるということに司馬自身が立証できたことを強調したかったために、『殉死』の準備期間中に『機密日露戦史』が刊行されていなかったと述べたのではないか。

今村均「司馬遼太郎氏の「要塞」を読んで」

今村は死去の約一年前、『別冊 文藝春秋一〇〇号記念特集』（一九六七年六月五日発行）「I 要塞」の所感を「乃木將軍は無能ではない」として『讀賣新聞』（一九七六年七月一四日朝刊）に投稿している。

今村は、「司馬氏は新しい観点から乃木希典將軍の軍事能力を熱心に研究され、これを率直に評論されている。」と評し、司馬が乃木に対して「相当の敬意なり善意なりをもって」執筆していることを読み取っている。しかし今村は「乃木將軍を精神主義者、文人としては偉大ではあるが、反面、幾個所かに「將軍は軍事能力は皆無であつた」という文字が見える点」について意見を述べている。

今村は、乃木のドイツ留学について司馬が「將軍の関心事はあくまで教育であり、精神美の追求であり、要塞と要塞攻撃に対する研究はなかつたようであつた」と記述したことについて反論し、今村の夫人の父・千田登文（軍旗事件の河原林少尉の後任連隊旗手）が今村に「乃木將軍は野戦には長じておられ、ドイツに留学するさいも、野戦を研究してこい、といわれておもむいたもので、要塞戦はあまり得手でもなく、その研究もしてこなかつた」と語つたことを紹介している。当時、要塞研究の先進国はフランスであつたので、今村は「乃木將軍が要塞攻撃にきわ立つた成果をあげ得なかつたといつて直ちに無能である、と

いうのは当たらない。」と言うのである。

また「軍司令官が参謀長の作ってきた計画を否として、やり直しを命ずることは、むしろ避けなければならないというような風習」があったことを述べている。

今村は、司馬に反駁したものの、乃木の軍事能力については評価しておらず、結局は司馬を支持した形になっている。戦後においても、今村は「軍神」乃木という虚像を傷つけないように配慮し、乃木の人徳面での功績を讃えている。

松下芳男『乃木希典』の旅順要塞攻略戦批判

松下芳男『乃木希典』（一九六〇、吉川弘文館）では、戦後、最も早く乃木の旅順要塞攻略戦が批判されていた。

ただし、松下は、乃木の作戦面については問題があると指摘しながらも、軍司令官としての器に関しては「当時から代わりうる適任者は、恐らくなかったであろう。」と認めている。（四頁）そして、乃木の欠点は欠点として取り上げなければならぬものの、「乃木は、その欠点を補うて余りある美点を、自ら身につけていた」と讃えている。（同前、一八一頁）

このように松下は、戦後においても、乃木の軍司令官として「徳望」の面で、戦勝を果たしたことを評価し、乃木「軍神」像に踏み込むことに禁忌している。

司馬が、松下の著書を参照したかどうかについては確証できないが、松下と今村の場合、乃木の軍事能力における議論の出所は同じ陸軍内部からである。乃木評価に関しては、松下も今村も生温いものであり、やはり決定的に乃木の旅順要塞攻略戦を批判したのは司馬である。

おわりに

司馬が、乃木の旅順要塞攻略戦を批判的に検討したことは、これまでの乃木「軍神」像を解体する突破口となったのである。司馬は、従来の乃木「軍神」像の禁忌に一步踏み込んで、旅順要塞攻略戦を非難し、そこから乃木「愚将」論を構築したのである。そこに『殉死』の功績があると言えよう。

註

（1）田中國重の当時の役職は、『東京朝日新聞』では、「大本營参謀」と紹介されている。谷寿夫『機密日露戦史』の編者附録には、「満州軍参謀・騎兵少佐・34歳」と記録されている。（六九四頁）

（2）谷が記した「一時」指揮権の「借用」という言葉に注目しながら、『殉死』（一九六七）と『坂の上の雲』（一九六九・一九七二）の同場面を比較すると、司馬が『殉死』の下準備として、谷寿夫『機密日露戦史』（一九六六、原書房）を読んでいないと言っている証拠が表われている。『殉死』と『坂の上の雲』の比較は本論文の趣旨ではないので、ここでは深く立ち入らない。

〔付記〕拙稿「司馬遼太郎『殉死』の基礎的研究（第I篇）」『哲学と教育』五七号（二〇〇九年三月、愛知教育大学哲学会）の訂正箇所

六六頁上段一五行目 第三軍の幕僚だけではなかった。↓（訂正）伊地知や豊島だけではなかった。

六四頁下段六行目 宿利には「アンペラ」の語はない。↓（訂正）宿利重「人間乃木（將軍篇）」における「穴居会談」の場面には、

「アンペラ」の語はない。

六〇頁下段四行目 植え、それを静子の体をかぶせ↓（訂正）植え、それへ静子の体をかぶせ